

団地再生卒業設計賞 奨励賞

斉藤 隆太郎

東京理科大学 工学部 建築学科

「住宅772 ～772戸の住宅と住む～」



斉藤隆太郎君の「住宅772～772戸の住宅と住む～」は現実に世田谷区深沢にある民間の開発した大規模な分譲マンションの建て替え計画である。だから今回の団地再生卒業設計賞にエントリーする要件を満たしていないという意見もあった。しかし資本経済の中で無自覚に計画されるこのような分譲マンションの有り様をクリティカルに見る視点を呈示できていることを評価したい。建築の卒業設計とは社会のシュミレーションを行っているのではない。この世に未だ存在していない夢のようなアイデアも、それを存在させる枠組みそのものを計画することであってよい。この離散集合形式の住戸の集合体は、細部を事細かく読んでも作者の意志が行き届いていることが理解できる。作者の腕力に拍手を送りたい。(北山)

概評
内田 祥哉

今回は、老朽団地に対する関心の強まりもあり、また、三回目でもあるので、応募者への周知範囲が広がり、様子の分かった応募者の数も増し、充実した内容の案が多くなった。

審査レベルは、ますます厳しくなると思われるが、今後も、将来の仕事として取り組む応募者が増えることを期待したい。

総評
西村 紀夫

3回目を迎えた今回の卒業設計展は、応募数は多くはなかったが、従来になかった戸建て住宅地を対象にした計画も数案あり、多様な取り組みが見られる。

全てが住棟レベルから街区や団地全体にわたる一貫性のある計画に取り組んでいる点は評価される。この中で、生活や集住のコンセプトと対応する再生手法や空間構成が明確な作品が賞の対象となっている。いずれも力作である。

一方、全般的に集住の持つオープンスペースとの関わりやランドスケープの捉え方が希薄に感じられ、案としての魅力に欠けたきらいがある。

第三回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 / 団地再生産業協議会

協賛：株式会社 合人社計画研究所
株式会社 東急コミュニティ
株式会社 長谷工コーポレーション

団地再生卒業設計賞 内田賞

千葉 神奈子 (神奈川大学工学部 建築学科)

団地再生卒業設計賞

船方 峻 (日本大学工学部 建築学科)

寺崎 雅彦 (東京大学工学部 建築学科)

団地再生卒業設計賞 奨励賞

斉藤 隆太郎 (東京理科大学工学部 建築学科)

応募期間：2006年12月下旬～4月20日(木)

審査委員：審査委員長 内田 祥哉 (東京大学名誉教授)

審査委員 石川 幹子 (慶應義塾大学環境情報学部 教授)

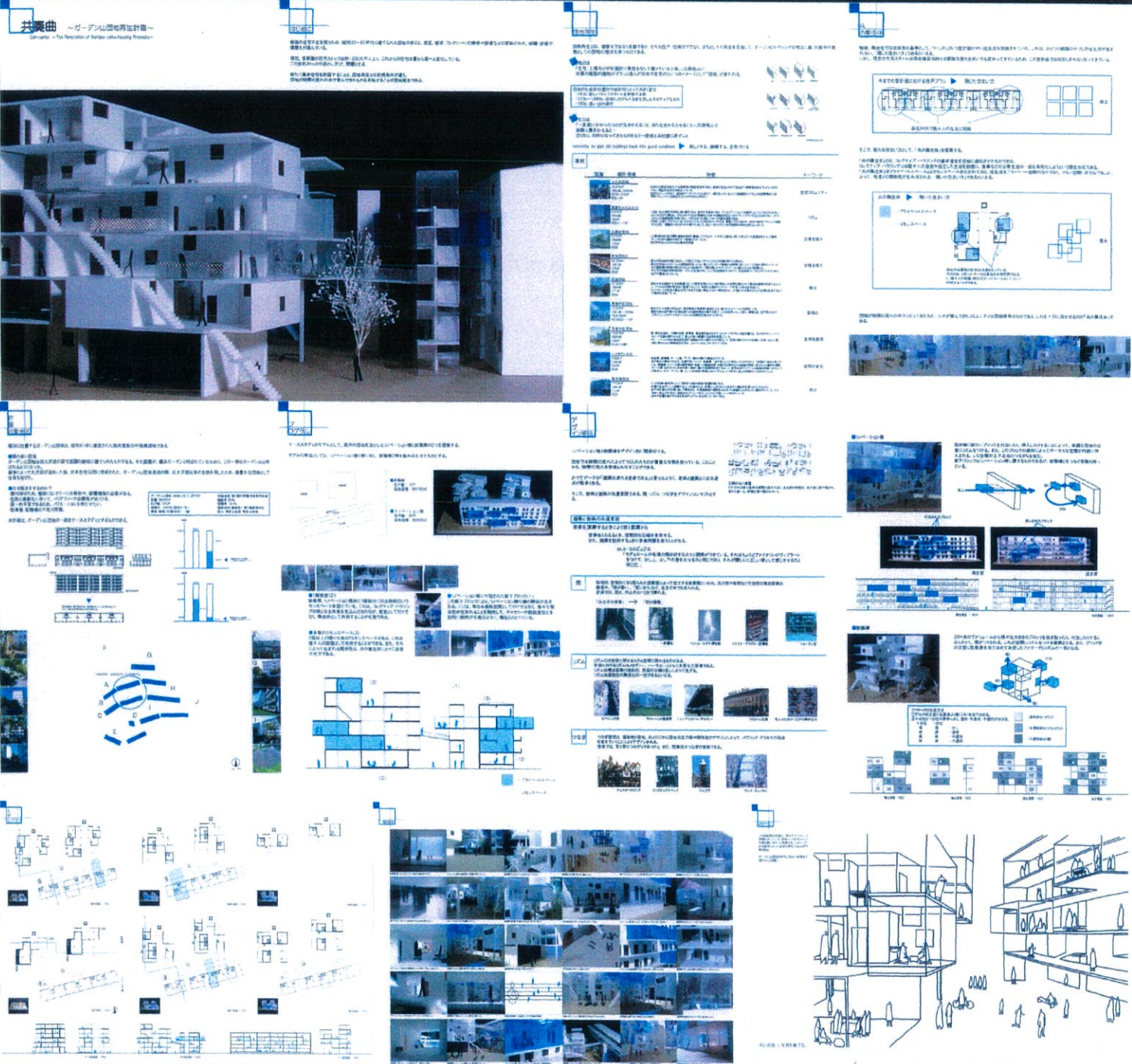
北山 恒 (横浜国立大学工学部 教授)

西村 紀夫 (NPO団地再生研究会副理事長/㈱市浦ハウジング&プランニング 専務取締役)

応募登録数：16点

応募作品数：11点

「共奏曲 ～ガーデン山団地再生計画～」

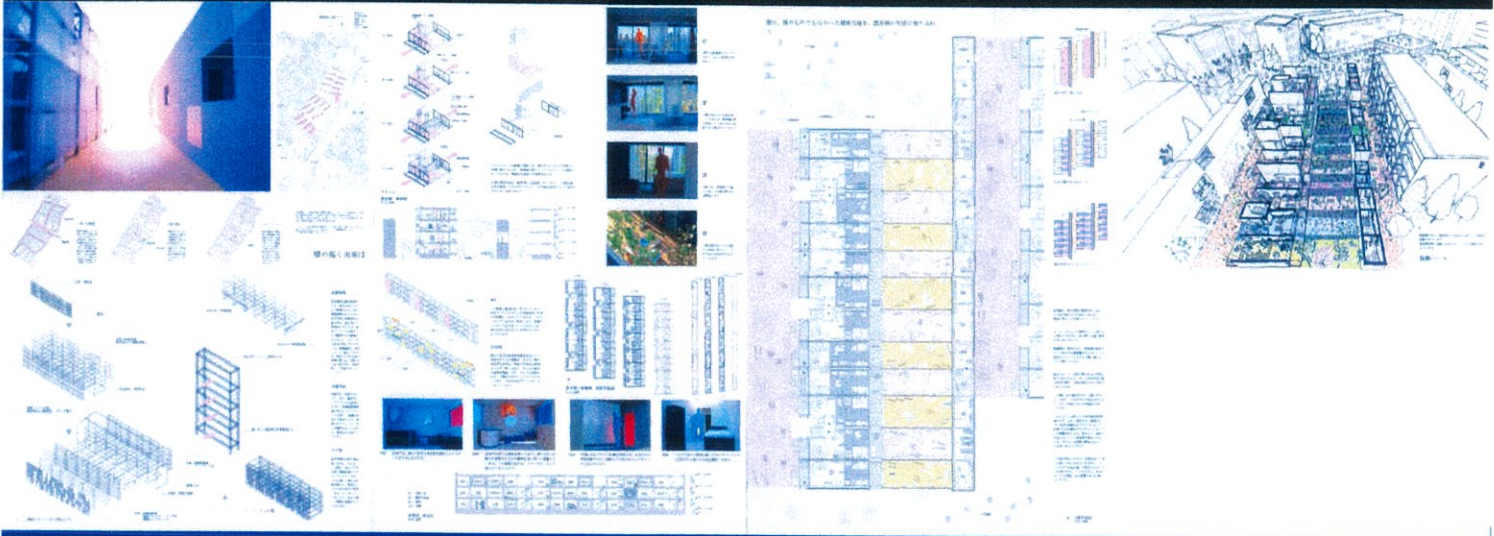


団地の再生は、単なる老朽の補修ではなく、居住者により長期間育まれたものを、かけがえのない財産として捉えるべきとし、それを生かした再生に取り組む提案である。再生手法は、増築・減築により画一的な団地にリズムを持たせようとしている。

また、生活面では、コレクティブ・ハウジングの理念を取り込み、団地全体にコミュニティを成り立たせようとしている。

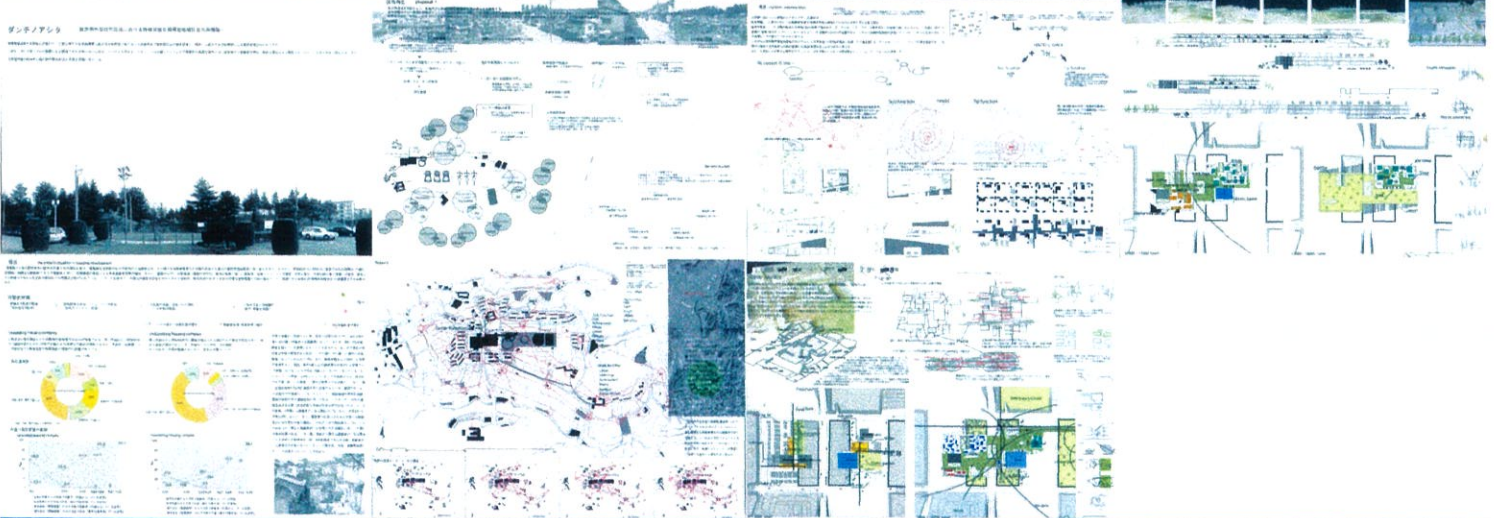
全審査員が、内容・発想ともに最も充実した案として推薦した提案である。（内田）

「壁の拓く未来は」



寺崎雅彦君の作品「壁の拓く未来は」は卒業設計の人気スポットである、都営青山北町アパートである。計画は卓抜である。既存住棟をそのままに既存住棟間にあるアスファルト道路の上に幅2.1mの壁のような開口部の少ない建築を建てる。壁の中は単身者向けの十分な空間が用意される。既存住棟は南北ファサードに耐震補強となる厚みを持ったスクリーンの提案、南側耐震補強スクリーン内にパイプスペースを設け設備更新の提案をする。1、2階の床を抜いてメゾネットを提案するのだが、新しい間仕切壁を設けて住戸規模には変更をかけず接地形住戸は倍増するという提案である。既存住棟間に新設する壁のような建築があることで外部空間はパティオのように生活あふれる空間に変質する。というストーリーである。この作者の「物質」に対する対応は高く評価したい。想定される問題に周到に解答が用意されている様に思える。しかし、この裏青山で想定されるプログラムはここで作者が提案しているようなナイーブものではないであろう。そして、周囲の都市状況から明らかに乖離している現在の状況に対して、いかなる折り合いをつけ都市との関係性を構築するのか、という視点が欠落していることが残念である。（北山）

「ダンチノアシタ」
郊外型大型戸建住宅団地におけるネットワークによる循環型社会の再構築



拡大する都市から、人口減少・都市の縮退への転換の中で、高度経済成長期に形成された郊外大型団地の今後は、大きな課題となっている。

この卒業設計は、地方都市の郊外型大型住宅団地を対象として、人口構造の変化、建築の老朽化、都市への住み替えによる空き家の発生、子供を取り巻く環境の変化、治安の悪化などの現状を精査し、市民の生活の実態に呼応する多様なアクティビティの場を挿入することにより、郊外に住む魅力を再発掘し、団地の未来を提案したものである。

日常的なコミュニティ活動については、極めてきめが細かく、モビリティオフィス、市民農園、安全性の確保など、多くの魅力的な提案が出された。しかしながら、センター機能については、過大であり、再考が必要である。

全国の郊外住宅地がかかえる今日的課題に正面から取り組み、現地の実感を踏まえて具体的提案を行った作品であり、優れた卒業設計として、高く評価できる。（石川）